

「高松古墳群第一号墳調査の意義について」

福島県立相馬高等学校郷土部

はじめに

相馬高校郷土部には、昭和21年の創部以来、福島県相双地区で発掘してきた遺物が郷土資料室に保管・展示されている。その中に福島県相馬市の高松1号墳から出土した遺物がある。昭和25年(1950)、郷土部OBが相馬高校を訪れ、盗掘や墓地の拡大で消滅する可能性があるかと相談したことが発端となり、高松1号墳(前方後円墳)が正式な手続きを経て高松1号墳の正式調査が実施された。8月6日～8日の調査で出土した馬鈴や管玉などは長らく本校郷土資料室に保管されてきた。2021年の福島県沖地震で郷土資料室も大きな被害を受けた。その復旧作業の過程で、当時の郷土部員が作成した調査報告書と実測図を目にし、高松1号墳の出土品と現在の状況に興味を抱いたことから現地で状況確認を行うことにした。

1. 高松1号墳の現況



【図1】福島県相馬市高松1号墳の周辺地図(「国土地理院地図を改変」)

高松1号墳は、相馬市街地南方、俗に「高松山」と称される東西にのびた丘陵上西側に位置する【図1】。この丘陵上にはその他に数十基の円墳や、高松横穴群をはじめとする横穴群が存在する。調査報告書をもとに現況確認を行った。高松1号墳は、標高約53mの高台にある前方後円墳で【図2】、全長21.5m、前方部6.8m、後円部13m、前方部の高さが1.5m、後円部が2.6mである。前方部は現在墓地となっており、削平されたことで周縁部と思われる段差がかろうじて面影を残している【図3】。後円部は石室部分が露出し、南北に長い構造である。草が地表面に根を張り、内部を詳細に知ることはできないが、窪みから石室の大きさある程度確認することができた。



【図2】高松1号墳西南角



【図3】部員の立ち位置が方形部の端(推定)

調査報告書には、石室を覆っていた天井石が4枚あったと推測している。うち2枚は現存しているのを確認できた。残りの2枚については調査当時、既に失われており、「1枚は墓石に利用され、他の1枚は持ち去られた」と記録されている。現存の2枚については、北から(A)1.53m、(B)1.82mの天井石が石室内に落ち込んでいた。現在は昭和の調査後に後円部南側に置かれたようで、(B)が昭和25年当時のままの形状を残し、(A)は半分だけが残存している状況である【図4】。しかし、再調査のため今年4月に現地を訪れたところ、今年3月16日発生 of 福島県沖地震によるずれが確認され、南側墳丘から斜面部へ、ずれ落ちそうな状況が確認された【図5】。



【図4】天井石



【図5】天井石の現状

高松1号墳は南に平野部が開け、北は宇多川を手前に市街地が展開する。古墳時代当時は遮るものもなく、権力者の墓が低地から望め、また高松丘陵からは南北を眺望できる絶好の条件の場所に高松1号墳が築造されたことが確認できた。

2. 副葬品と被葬者について

高松1号墳からは、既に明治時代に多数の出土品があったことが知られている。これは常磐線敷設工事の際、横穴古墳が発見されたためで、これ以後、盗掘が多く行われたと伝えられている。発見された副葬品として女性埴輪頭部、金銅製歩揺付雲珠などがある。これらの出土品は6世紀後半のものとして推定され、この古墳も同時期の築造とみて間違いはないと考える。相馬高校が昭和25年に実施した調査の際、埴輪片や土器、そして馬鈴、金銅製盤の口縁部などが出土した(図6、7)。



図6 馬鈴



図7 金銅製盤口縁部

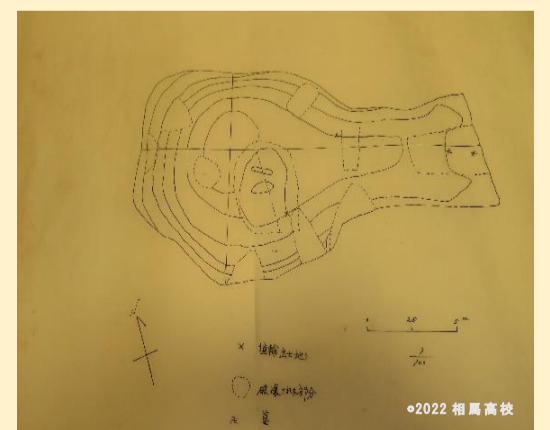
この調査による他の出土品として、石室内からは桂甲小札、管玉、鉄鏃、須恵器片などがあり、後円部および後円部と方形部の接続する墳丘上から埴輪片も確認されている。注目すべきは、東京国立博物館が所蔵している**金銅製歩揺付雲珠**である。『東京人類学会雑誌』(明治三十四年四月二十日発行)に大野雲外が次のような記事を載せている。「相馬郡八幡村大字坪田高松山の古墳から出ました・・・鍍金製の風車形に作られたもの、車の心棒を通して周囲に其枝は七本或は九本を垂れ曲りたる環へ花弁やうのものをぶらさげ美麗なるものである」。この金銅製歩揺付雲珠は、群馬県高崎市の綿貫観音山古墳、沖ノ島祭祀遺跡などごく少数の出土例しかない。高松1号墳の福迫横穴古墳からは金銅製双龍文環頭太刀が出土しており、これら豪華な副葬品はヤマト政権との関係性により地域の豪族に下賜されたものと推定される。『国造本紀』には**上毛野氏国造の孫である鹿我別が浮田国造に任命された**記事があり、高松1号墳の被葬者も浮田国造の墓とみる説が有力である。ヤマト政権下で東国経営や外交を担当した氏族との関連を推測できる。

3. まとめ

昭和25年8月の調査内容は、翌年2月に「福島県立相馬高等学校郷土室」によって『福島県相馬郡八幡村高松古墳群第一号墳調査報告書』にまとめられた【図8】。また、昨年の被災時に郷土資料室を整理した時に、この報告書に掲載された実測図の原本【図9】と、当時の部員が写生したと思われる高松1号墳の絵が発見された。報告書の内容や実測図をもとにして、私たちは現地で確認作業を行った。現代の発掘の方法とは違い、高校生が主体的に調査発掘を行っていたことに改めて驚くと共に、その発掘の成果が、教科書でしか知ることのできなかった古墳時代の相馬地方の様子を身近に感じることができた。そして、貴重な文化遺産が後世に伝わることなく散逸してしまったことは、相馬地方の古代史解明につながる可能性をも失ったのではないかと悔やまれた。何よりも地域に住んでいる者が古墳の存在とその意義を知らないことが残念でならない。忘れ去られようとしている地域の歴史に光を与えることも高校歴史系部活動の責務ではいかと痛感し、先輩達の業績を含め、文化財のあり方を今後も研究していきたい。



【図8】調査報告書



【図9】実測図

〈参考文献および出典〉

『福島県相馬郡八幡村高松古墳群第1号墳調査報告書』(1951 相馬高校郷土研究室)

『相馬市史4 資料編I 原始・古代』(相馬市教育委員会)

図2～図5 郷土部員撮影

図6～図9 相馬高校郷土部所蔵